

兄弟姉妹の皆様

私たちのローマのパパ様・故フランシスコ教皇様は今回のシノドスにおいて、「第2バチカン公会議を見直し、立ち戻り、生かしてほしい」とメッセージをくださいました。

2022年待降節から、ミサの式次第が新しくなりました。これも、その新しい流れの一つです。

今回はサンパウロ発行 第2バチカン公会議 公文書全集 南山大学監修「第4章 聖務日課（教会の祈り）」を解説します。

私たちも、ミサや祈りに主体的に関われるように、一緒に学びましょう。

尚、わかりやすい表現を用いるため、多くの資料を参考にさせていただいておりますことをはじめにお伝えしておきます。

主任司祭 ペトルス・ウィリー・ソバ・ドイ O.C.D.

第4章 聖務日課（教会の祈り）

典礼憲章

③7 ～第二バチカン公会議公文書より～

キリストと教会の祈り：新しい永遠の契約（神様からの賜物）の最高の祭司であられるキリスト・イエスは人間性を取り、天上で永遠に歌われている賛歌を、この追放の地にもたらししてくださいました。イエス様は、全人類共同体をご自分と結び付け、神様への賛美の歌をご自分とともに歌わせてくださるのです。

まことに、イエス様は祭司として、ご自分の教会を通じてその職務を継続されておいでです。この教会は、聖体祭儀（ごミサ）だけでなく、ほかの方法によって、特に聖務日課を果たすことによって、主を絶え間なく賛美し、全世界のために執り成すことになるのです。

聖務日課は古来のキリスト教伝統によって、神様への賛美を通して昼も夜も一日のすべてがささげられるように構成されています。この素晴らしい賛美の歌が、司祭や教会の定めによってゆだねられた人々、あるいは承認された形式に従って司祭と心を合わせて祈るキリスト信者によって正しく行われる時、それはまことに「花婿に語り掛ける花嫁の声」であり、まさにイエス様のご自身の体とともに天の父にささげる祈りなのです。

したがって、これを行う全ての人は、教会の務めを実行し、また、「イエス様の花嫁」として最高の栄誉にあずかるのです。何故なら、神様に賛美をささげる人は「母なる教会」の名によって神の玉座の前に立っているからです。

（つづく）